

菊池道樹先生の定年退職をお祝いして

著者	鈴木 豊
出版者	法政大学経済学部学会
雑誌名	経済志林
巻	87
号	3・4
ページ	1-4
発行年	2020-03-20
URL	http://hdl.handle.net/10114/00023606

菊池道樹先生の定年退職をお祝いして

経済学部長 鈴木 豊

菊池道樹先生は1975年に一橋大学社会学部を卒業され、1977年に一橋大学大学院社会学研究科社会学専攻修士課程を修了し、修士号を取得された後、1981/04/01-1982/03/31の間、一橋大学社会学部の助手を務められ、その後、1982年の4月に、本学経済学部の特別研究助手として着任されました。（採用科目は「アジア経済論」で、ヴェトナムの社会経済を分析する論文で採用されたと、以前、お聞きした記憶があります。）そして、1983年4月に助教授（「アジア経済論」担当）、1990年に教授（「中国経済論」担当）へと昇格され、2006年～07年には比較経済研究所所長、2011年～12年には経済学部長を務められ、38年の長きにわたって、法政大学経済学部の教育研究に多大な貢献をされてきました。

東京外国語大学、東京大学教養学部、明治大学大学院等で、中国などアジア経済に関する講義を担当する非常勤講師も務められたほか、法政大学大学院で、数多くの留学生の指導教員を務めてこられたことも大きな教育上の貢献だと思います。

菊池先生は、当初のヴェトナムの農業経営と土地所有を中心とした社会経済の研究から、中国経済の研究にシフトされていきました。菊池先生の学術データベースから、興味深い研究要約を引用させていただきますと、まず、比較経済研究所研究シリーズ『中国経済の新局面－改革の軌跡と展望』山内一男・菊池道樹編1990年に所収の「郷鎮企業論」と題した章で、中国の

改革開放以来の10年間のめざましい経済成長をリードした農村地域に立地する町営・村営および個人経営の郷鎮企業からなる非国営の企業群が急速な発展を遂げた理由を解明され、郷鎮企業の発展要因は、地方政府とのパートナーシップなど、市場経済体制への過渡期、中国独特の官民関係にあることを明らかにされました。

菊池先生は、その後、1993/04/01-1995/03/31の2年間にわたって中国社会科学院経済研究所に留学され、さらに中国経済の研究を深められたわけですが、(1995年本学着任の)私にとって、もっとも印象があるのは、帰国後、1998年に『経済志林』に発表された「新制度学派の中国経済論—農村工業化論(その1)—」という50ページ強に亘る論文です。これは、当時アメリカ経済学会で主流となりつつあった「新制度学派」の研究者たち(例えば、スタンフォード大学の青木昌彦教授、銭穎一(Qian Yingyi)助教授、バリー・ワインガスト教授ら)が、中国の経済システムとりわけ農村地域の工業企業組織を、どのようにとらえているのかを整理した展望論文ですが、契約理論やゲーム理論を使った制度分析に関心があった私には、理論分析と制度分析の融合の観点から、とても興味を掻き立てられました。

その後、特に2000年代に入って、私は、菊池先生に大変お世話になりましたので、それについて書かせて頂きたいと思います。まず、菊池先生は、私が執行部副主任の時の主任でいらっしゃいました(学部長は靄見先生)。それまで、執行部とは最も縁遠いのではと、恐らく周囲から見られていた私が、何とか1年間、耐えることができたのも、靄見先生と菊池先生という、理解のある先生方の執行部に入れたからだだと思います。「波長」も上手く合っていたように思います。

さらに、私が比較経済研究所の所員を務めていた時(2006年~2007年)の所長でいらっしゃり、数多くのアドバイスや機会をいただきました。まず、『中国研究月報』(社団法人中国研究所)に「中国経済研究の最前線」の特集を組むということで、私にも執筆の機会を与えてくださりましたが、その時の論文「中国国有企業の民営化問題」および「垂直統合型多国籍企

業の出現（外資による国内資産の合併買収）」への不完備契約（資産所有（財産権）アプローチ）『中国研究月報』2006年は、契約理論や組織の経済学の視点から、中国の制度問題を分析する既存研究を整理する機会となりました。このとき、専門家の菊池先生から多くのコメントを頂けたことは、とても参考になりました。同じ時期、エコノメトリック・ソサイアティーの極東学会が北京で開かれ、私も論文発表で参加したのですが、招待講演で、先述の銭穎一（Qian Yingyi）教授(当時は既に清華大学に戻られ、学部長を務められていました)が、ゲーム理論やメカニズムデザイン論を使った中国制度改革の研究を概観されました。大変参考になるとともに、それをきっかけに、菊池先生とも、理論分析と制度分析の融合という観点から、中国経済や制度改革に関する議論を深めていくことができたと思います。

さらに、2008年と2009年の夏、菊池先生の科学研究費基盤研究（B）プロジェクト『中国浙江省における民間企業に関する基礎調査』のメンバーとして、中国浙江省における民営化の現地調査（フィールドワーク）に同行し、それぞれ10日間の現地調査を通じて、論文や本を読んだだけでは得られない、貴重な経験を得、また、中国経済に関する私なりの「現実感覚」を持つことができました。

とりわけ、中国の現地調査においては、訪問先の方々と夕食での宴会があるのですが、思い出に残っているのは、浙江工商大学の張仁寿教授（副学長）のグループ、浙江大学の陳建軍教授のグループ、浙江吉利集団の王副社長らのグループ¹⁾、杭州市の経済産業局（つまり地方政府）の役人や産業界の方々と宴会です。お酒も楽しく飲ませて頂きましたが、酒豪の菊池先生は、いくら飲まれても平然とされていたように思います。王副社長らのグループとの宴会では、西湖の湖畔の高級レストランで、女優の小雪似の副社長秘書ら10数人と会食したことも楽しい思い出です。私もお酒

1) 張仁寿教授は、「温州模式」という浙江省温州の地域経済発展の先駆的研究で有名な方です。

は一応好きな方ですので、その意味でも、2回の海外調査は有益かつ楽しかったように思います。

このように、2004年の執行部副主任時代、2006年から07年の比較研究所員時代、2008年から09年の浙江省の現地調査への同行と、菊池先生には大変お世話になりました。先生とのお付き合いをきっかけに、中国経済の専門家ではない私も、興味を持った中国経済や制度改革に関連する論文を書きためて、この2020年1月に『中国経済の制度分析：契約理論・ゲーム理論アプローチ』日本評論社という本を出版することができました。この場を借りて、改めてお礼を申し上げたいと思います。

菊池先生は、2011年から12年に経済学部長をされた後は、学部長経験者として、その後続く執行部（牧野執行部、奥山執行部、そして現執行部）に、多くのアドバイスを下さりました。私も2017年から学部長を拝命しているわけですが、全学的な観点からどう行動すべきか、学部を適切に運営していくためには、ルールと裁量のなかでも、原則（ルール）の部分をかちんと守ることが必要で、時には、強く主張して、自分の信ずるところを通さねばならないという姿など、見せて頂きました。

その菊池先生も、残念ながらこの3月で定年退職されることになりました。先生の教えてこられた「中国経済論」は、国際経済学科の「地域研究科目群」を形成する重要科目ですし、また、「中国」はGDP世界第2位の大国であるのみならず、計画経済から市場経済への移行、成長と格差、グローバル化、企業組織の多様性、社会保障、環境問題等など、重要な研究課題の宝庫でもあります。大学の「グローバル化戦略」でも、中国は最重要地域として挙がっており、受入れ留学生数第1位の母国で、学部や大学院の外国人留学生への研究教育の面からも、先生の後に続く「中国経済論」の専任教員を採用する必要性は大きいです。ぜひ良い専任教員採用人事を行うことができれば、と思っております。

菊池先生、38年間お疲れ様でした。今後とも、お体に気を付けて、末永く活躍されてください。